

雲南省羊拉郷チベット族の 生業形態および葬儀風習

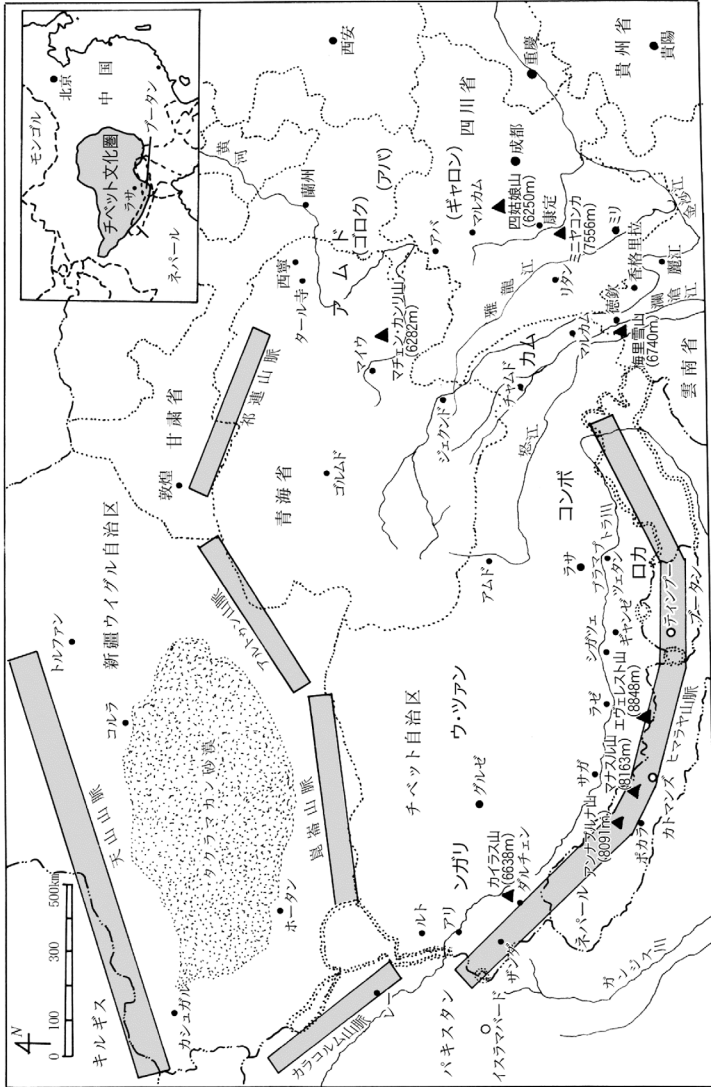
——尼米、里農を事例として——

金丸良子、高野優紀

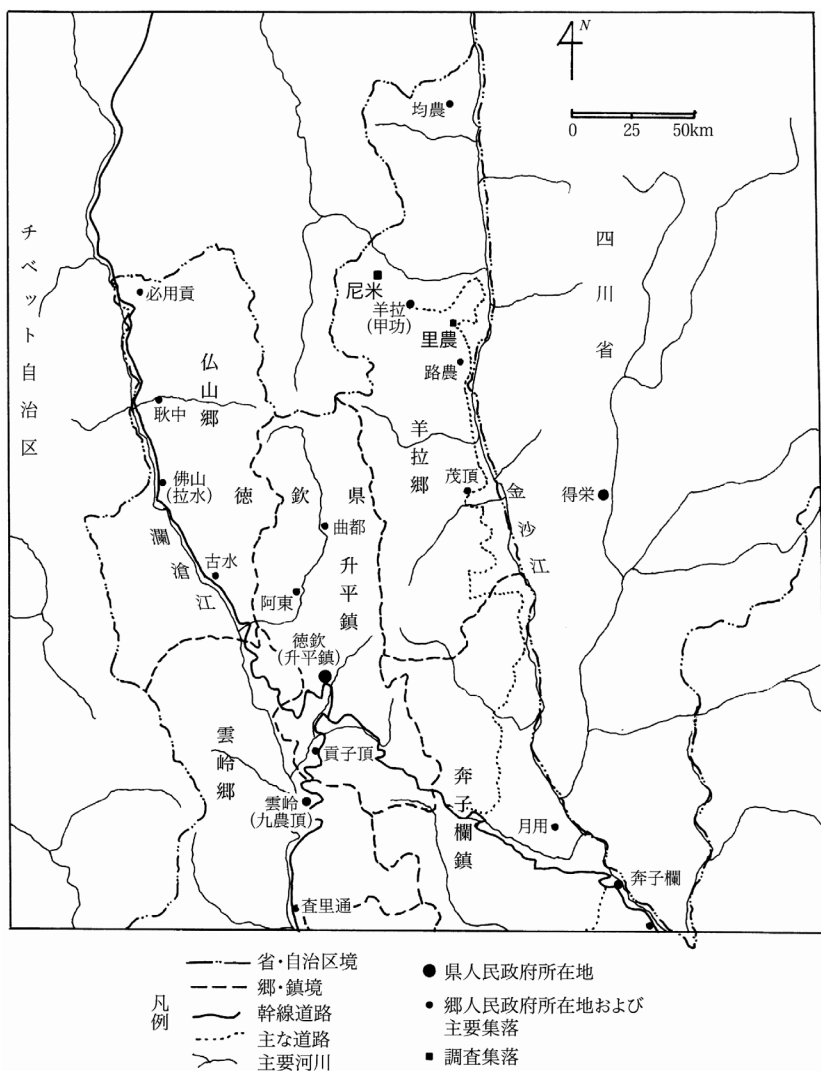
1. はじめに

筆者の一人高野は、チベット族の輪廻思想、およびそれに関連する民俗文化を研究テーマとしている。「チベット」というと、まずチベット自治区を思い浮かべる人が多いであろう。しかし「チベット」の範囲はそれ以上に広い。現在、チベット族が居住しチベット文化を有する地域、いわゆる「チベット文化圏」と称される地域は、中国、インド、ネパール、ブータンにまたがっている。また中国の国内でも、チベット自治区のほか、青海省、甘肅省、四川省、雲南省に分断されている¹⁾。その面積は、中国全土のおよそ1/4を占めるほど広大である(第1図)。地方区としては、第1図で示されているように、アムド、カム、コンボ、ロカ、ウ・ツァン、ンガリの6地方に分けることが多い。なおアムドに関してはさらにゴロク、アバ、ギャロンの地域に再区分されることがある。

険しい山々に囲まれ、かつ非常に高地に位置するためチベットは、古来より往来が容易ではなかった。また標高差などによって自然環境に違いが生じるため、山を隔てて多様な生業形態や民俗文化が点在しうる。よって、「チベット文化圏の中心はラサチ帯である」と言っても、ラサチ帯の風習を、チベット全体に当てはめることができない²⁾。雲南省迪慶チベット族自治州についても、他のチベット地域と比べてどのような共通点および相違点があるのかを、自らの目で確認したいと考えていた³⁾。しかし特にここ数年、中国国内のチベット地域全体で、立ち入りが厳しく規制されるようになってきており⁴⁾、外国人研究者が正面から研究名目で滞在許可を得るのは難しい状況となっている。そのような状況の中で、共著者である金丸良子は、長年にわたって中国の少数民族地域でフィールドサーヴェイを実施してきた。チベットに関してもすでに複数の研究



第1図 チベット文化圏
 (出所) 旅行人編集室編(2006):『旅行人ノート チベット 第4版』旅行人
 付図などを参考にして作成



第2図 地域概略図

〔出所〕 雲南省徳欽県志編集委員会編(1997)：『徳欽県志』雲南民族出版社 付図などより作成

成果を発表している⁵⁾。その実績から、雲南省で正式な許可を得て調査研究を行うことが可能であった。多くの少数民族が暮らす雲南省では、「西部大開発」という名目で大々的な観光開発が進められており、外国人にも比較的開放的である。このような特別な事情から、迪慶チベット族自治州での調査報告も比較的多くみられる⁶⁾。そこで、「主要道路から一番遠く離れた奥地に行こう」と考え、雲南省の最北端、羊拉郷をフィールドサーヴェイの地域と選定した(第2図)。この現地調査は、金丸とともに、2012年の9月中旬に実現した。

調査対象としては、羊拉郷の中でもとりわけ特色のある2つの集落——半農半牧という伝統的な生業形態を保持している西部に位置する尼米と、鉱山開発で経済的に豊かになりつつある東部に位置する里農——をとりあげ、その生業形態と民俗文化の中でも葬儀風習について比較考察し、論を展開する。なお、生業形態と葬儀風習という2つの項目にしぼった理由は、まず第1に、「フィールドサーヴェイに基づく実証的な研究は、生活の経済的な基盤とでも称すべき物質文化に関する基礎的な詳細な調査を踏まえることこそが、最低の必須条件である」(金丸2008:18)という金丸の姿勢を踏襲した。第2の理由として、限られた時間の中で高野の研究テーマである宗教文化を調査するにあたり、靈魂意識が最も顕著に現れる葬儀風習にしぼって聞き取りをすることが妥当だろうと考えたためである。

2. 羊拉郷の概況

羊拉郷は、雲南省迪慶チベット族自治州徳欽県の最北端に位置し、東は金沙江を挟んで四川省甘孜チベット族自治州得栄県と、西はチベット自治区芒康(マルカム)県と接している。羊拉郷の姿は、チベット自治区と四川省の境に細長く食い込むような形をしており、郷名の羊拉(ヤンラ)とはその名のとおり、チベット語でヤクのツノを意味する「ヤクラ(གཡལ་རྩ་)」に由来するという。

羊拉郷の面積は1087平方キロメートルで、西には標高5000メートル級の察里雪山(5534メートル)や甲午雪山(5220メートル)を抱く一方、

四川省との境界を流れる金沙江流域は標高 2500 メートルほどしかない。郷の東西の幅はおよそ 20 キロメートルしかなく、東西で標高差が激しいため、山を隔てるごとに自然環境が違ってくる。平均海拔は 3000 メートルを越え、年間平均気温は 6～8.5℃、年間降水量は 600～800 ミリメートル、チンクー麦・小麦・ソバ・トウモロコシなどの農作物を生産している。杉・クヌギ・松など木材や、冬虫夏草・バイモ・ハナスゲなど薬草のほか、銅・鉄・石膏など鉱物資源も非常に豊富な地域である⁷⁾。

羊拉郷周辺地区は、歴史的に、奔子欄鎮石議村に存住する王氏という土司の管轄とされ（奔子欄の位置は第 2 図を参照）、清朝時代（1164-1911 年）は維西庁、中華民国時代（1912-1949 年）は維西県に属していた。しかし、険しい山々に囲まれた上に住人も少ない辺境であった。そのため実際には統治の及ばない地区であったと伝えられている。羊拉郷が中華人民共和国の管理下に入ったのは 1956 年のことで、雲南省内でもっとも遅く「解放」された地区である。この時に羊拉郷は維西県第六区所属となり、その後 1959 年の区画整理に際して徳欽県に区分けされ、現在に至っている。

羊拉郷は迪慶チベット族自治州の中でもチベット仏教への信仰が篤い地区といえる。すなわち徳欽県に 16 箇所あるチベット仏教寺院のうち、7 箇所がこの羊拉郷内にある。これらの寺院は文化大革命の時期に一度破壊されたものの、80 年代後半から国家の補助金を受けて再興され、近年は宗教行事も復興されている。

現在、羊拉郷は 4 つの行政村（羊拉・甲功・帰吾・茂頂）から構成され、58 の村民小組がある（第 1 表）。住民のほとんどはチベット族である。

『徳欽県志』に記載された 1990 年の統計によれば、羊拉郷の人口は 1007 世帯 6255 人、その内チベット族が 6246 人で、99.8 パーセントを占めている。一方、最新のデータである 2011 年の羊拉郷の人口は⁸⁾、1001 世帯 7406 人で、その内、農業人口 5913 人、城鎮人口 200 人、外来人口 1293 人となっている。以上の資料から、最近 20 年間における外来人口の増加が顕著である。その主な原因は、鉱山資源の開発による他の地域からの労働者流入であると推察できる。しかしこの外来人口 1293 名を除い

て見れば、戸数が6戸減少しただけである。2011年の農業人口と城鎮人口を合計した6113人は、1990年のチベット族6246人とほぼ同一の家族であると考えられる。厳重な一人っ子政策の下で人口はやや減少傾向にあるが、他地域への出稼ぎなどによる大きな人口流出はなく、現地のチベット族が地元での生活を維持してきたことが伺える。

第1表 徳欽県羊拉郷の概況（2009年）

項目 行政村	戸数(戸)	人口(人)	備考
甲功村	233	1337	郷人民政府所在地。14の村民小組(尼米, 里農など)
羊拉村	275	1696	18の村民小組
婦吾村	182	1090	14の村民小組
茂頂村	310	1818	12の村民小組

〔出所〕羊拉郷人民政府の資料から作成

言語について、羊拉郷が含まれる雲南省迪慶チベット族自治州は、チベットの伝統的な呼称でいえば「カム」地方に属し、チベット語のカム方言を話している。しかし、羊拉郷の住民は日常生活でチベット語を話せても、これまでチベット語での教育をうけてこなかったため、チベット文字の読み書きができる人はすでにいない。「解放」以来、初等教育から漢語教育を行ってきたので、就学した者であれば中国語を使うことが出来る。道路の標識や郷政府の看板などは、すべて漢字のみで書かれていた。

交通事情に関して羊拉郷は、道路の敷設がもっとも遅れた地区のひとつである。国道214号から羊拉郷政府につながる全長147キロメートルの道路を、8年がかりでようやく開通させたのは2000年、わずか12年前のことである。しかし道路事情は依然として悪く、雨が降ると道がぬかるんだり、土砂崩れで道が塞がれることがある⁹⁾。郷人民政府の書記によれば、定期バスは1日1本のみで、それも今年2012年8月に運行を開始したばかりだという。現在、羊拉郷からチベット自治区芒康(マルカム)

県につながる道路を建設する計画があり、順調に進めば2013年にも完成する予定である。

以上のとおり、羊拉郷人民政府によれば、羊拉郷は「宗教の郷、高原の郷、純チベット族の郷」といった特色を具えている郷といえる。

しかし、住民の生活は近年、大きな変化に直面している。第1に、鉱山資源の開発が進められている。具体的には、2000年以降、羊拉里農銅鉱という会社が建設され、新しい道路を通してトラックが銅を含んだ岩石を運び出している¹⁰⁾。鉱山周辺の里農や魯農では、各世帯から1名を銅鉱へ就労させ、鉱山から一定の収入を得ている。第2の変化としては、「集中辦学」と呼ばれる教育システムの実施があげられる。2011年より、羊拉郷内のすべての小学校が廃校となり、80数名の生徒たちは、羊拉郷から遠く離れた奔子欄鎮の小学校で、寄宿舎生活を送っている¹¹⁾。しかもその費用——学費、寮費、食費、教科書代、交通費など——はすべて県政府が負担し、出費する必要はない。このような方式は、すでに青海省など他のチベット地域でも実施されてきており、「就学機会の平等」という観点からメリットも大きいといえる。しかし家族の絆を体得する家庭教育、あるいは伝統的な生業形態や民俗文化の保持といった視点で考えると、村落の子供が全員、小学1年生から両親や故郷と離れて暮らすというのは、いかがなものであろうかという疑問がわく。今後、村落の生業形態や民俗文化は、現在以上に大きく変貌していくことが想定される。

3. 羊拉郷チベット族の生業形態

羊拉郷の生業形態は半農半牧である。農作物は主にチンクー麦・小麦・ソバ・トウモロコシであり、家畜はヤク、黒豚、ニワトリなどである。2011年では、食糧総生産量は236万キログラム、家畜の飼育総頭数は46969頭、農民1人当たりの純収入は3910元とされている。

以下、羊拉郷の2つの集落——尼米、里農——を事例として検討する。

1) 尼米の生業形態と現状

羊拉郷人民政府の書記によれば、尼米は羊拉郷の中でも伝統的な民俗

文化や生産様式が比較的よく保存されている村だという。尼米は甲功村を形成する14の集落（村民小組）の1つであり、甲功村の西側、チベット自治区との境界付近に位置している。標高は3000m、年間平均気温は13℃、トウモロコシ・チンクー麦・小麦などの農作物を生産している。郷人民政府によれば、2009年、33世帯161人が暮らしており、耕地面積は163.77畝、林地は8000畝、経済林果地は90畝で主にクルミを植えている。その他、漢方薬の冬虫夏草がこの村の大きな収入源になっている。

尼米は木材が非常に豊富なところで、集落内の各所に立派な木材が積み上げられている。住民の話によると、その木材は冬の間に山から伐採し、何年も保管したあと、家の増築などで必要になった時に使うという。国の規制により、他地域への販売は許されない。現在ではほとんどの住民が25本、あるいは39本の柱で建築された立派な家を構えている。厨房の薪も欠くことがない。電気は1966年ごろから通電し、水道も2005年ごろから各家庭に完備された。固定電話はあるが、携帯電話は電波が入らず使えない。

交通事情に関しては、甲功村から1本の道路が開通しているが、未舗装の山腹の道路で、車両が1台やっと通れるほどの幅でしかない。雨が降ると地すべりが起き、道が塞がれることもあるという。尼米に入った日は晴れていたが、甲功村から1時間半もかかった。集落に車は3台しかないが、バイクは各家庭にあり、定期バスのない尼米の、重要な交通手段となっている。

尼米（ニミ）の名前の由来について、郷人民政府で聞いた話ではチベット語の「神山の間（あるいは中心）」に由来するという。しかし羊拉郷ではすでに述べたようにチベット文字が失われ、郷人民政府のチベット族職員ですらチベット文字を知る人がいない。そのため、その綴りを現地で確認できなかった。尼米を「神山の目」と解釈するなら、そのつづりは“གནས་མེད།（ネミツ）”であると推定される。後日、奔子欄鎮で民族宗教事務委員会の方に確認し、書いてもらったところ、尼米はチベット語で“གཉེན་མེད།（ニメ）”、「無二（ふたつとない）」という意味であるという。これについては、現地の標識も地図もすべて漢字表記のみであるため、どちら

が本当なのか、今のところ確実な証拠を得られていない状態である。

尼米からさらに西へ向かった山頂付近に、覚頂寺（または角頂寺）¹²⁾と呼ばれるチベット仏教寺院がある。一本道で、車は途中までしか入ることが出来ない。そのため、尼米から30分ほど行った山腹で車を降り、山道を1時間近く歩いてようやくこの寺院にたどり着いた。同寺はちょうど雲南省とチベット自治区の境に位置し、双方から僧侶と信者が集っている。現在14名いる僧侶のうち、4名は雲南省出身、10名はチベット自治区の出身である。雲南側についていえば、「解放」前、寺院が政治権力を持っていた時代は、覚頂寺が周辺の尼米・格古・差達3集落を管轄していた。『徳欽県志』によれば、文化大革命で破壊される前、同寺は経堂1つと僧舎9つから成り、23名の僧侶がいた。その後、1987年に2万円の補助金を得て経堂大殿を再建した（『徳欽県志』：325）。

現在は、農曆の1月16日にだけ、この地区の住民がそろって寺院に参拝する。それ以外は個々のニーズによって、個別に参拝するか、または僧侶を自宅に呼んで法事を行う。さらに、隔年のチベット暦9月18・19日には、「チャム」とよばれるチベットの宗教舞踏が披露される。このとき、覚頂寺の僧侶だけでは人数が不足するので、チベット自治区の方から手伝いの僧侶を呼んで行く。寺院の堂には、カラフルなチャムの面が、ひっそりと出番を待つように壁にかけられていた。

L.G. 氏の場合

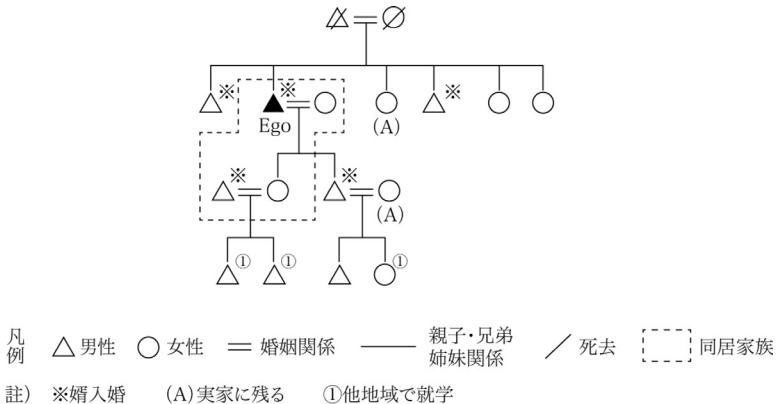
調査の対象であるL.G.氏は、1952年に羊拉郷甲功村で生まれた。同氏は、「解放」後はじめて設置された完全中学の第一期卒業生で、中国語も上手に話す。よって聞き取りは、チベット語通訳を介することなく、直接中国語で行うことができた。また、L.G.氏は現在、郷人民政府で副主席の職務についていると同時に、「はだしの医者」と呼ばれる民間医を長年やってきた経験もある。そのため、地元の事情に詳しく、人々からの信頼も厚い。このような事情から、郷人民政府より紹介を受け、同氏を調査の対象とした。

L.G.氏は尼米に婿入りをしており、現在、尼米の家には妻（57歳）と長女（33歳）、長女の婿（39歳）の4人が暮らしている。長女夫婦には2

人の子供（16歳と13歳）がいるが、どちらも他地域で就学中である。L.G.氏自身は郷人民政府の仕事の関係で、通常は甲功村にすることが多い。長男（37歳）も父が入り婿だったのと同様に、甲功村の妻（33歳）の家に入り婿している。長男夫婦にもまた2人の子供がおり、孫娘（13歳）は奔子欄で小学校に通い、孫息子（5歳）は就学前でまだ村落内で生活している。また、L.G.氏自身は6人兄弟の5番目であるが、兄も弟も家を継いではおらず、4番目の姉が実家に残ったという。ここでは婿入り婚が頻繁に行われている点に興味をもたれる。

L.G.氏の尼米の家では7.4畝の耕地を所有しており、小麦・チンクーマイ・トウモロコシ・ジャガイモ・ソバを栽培している（第4図）。村落内ではクルミの樹が随所にみられるが、同氏の家でも20本ほど所有しており、毎年500キロほどの収穫がある。昨年2011年はクルミだけで6000元ほどの収入を得た。また、5月には冬虫夏草を採取し、昨年分で3.9万円もの収入を得ている。今年採取した冬虫夏草はまだ売却しておらず、買い付け人が村に来るのを待っている。

家畜はヤク5頭、黄牛9頭、黒豚8頭、ニワトリ7～8羽を飼育してい



第3図 L.G.家の家族構成
 [出所] L.G.家での聞き取りにより作成

作物(地方)名	月												収穫 (2011年)(斤)
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
小麦 (zuo')						■					■		800
チンクー麦 (gāle')						■					■		380
ソバ (zuo')						■					■		350
トウモロコシ (dāmo')						■					■		800
ジャガイモ (háméi)			■									■	300
果物	クルミ (20本)											200	
家畜など	ヤク(zhé yá) 8頭 黄牛(Balóng) 9頭 黒豚(pá) 8頭 ニワトリ 7~8羽												
その他の動物	馬 ^① 1頭 ロバ ^① 1頭 犬 ^② 1頭												

凡例   註)斤は500グラム
①は運搬用 ②は番犬

第4図 L.G.家の農業カレンダー
〔出所〕尼米L.G.家での聞き取りにより作成

る。この地域では毎年、各家で豚を3~4頭、牛1頭ほど、屠殺して食用にしているという。L.G.氏の家の場合、この他に馬1頭、ロバ1頭、番犬1頭がいる。以前は馬とロバが人や荷物を運んだが、最近ではバイクに代わった。2006年以降、L.G.氏の家でもバイクを2台所有するようになり、1台はL.G.氏が、もう1台は長女の婿が使用している。

2) 里農の生業形態と現状

羊拉郷人民政府の書記によれば、里農と魯農の両集落は共に鉞山のあるため、羊拉郷の中でも経済的に豊かだという。しかし魯農への道は地すべりで不通であった。そのような事情から、里農でのみの数時間の聞き取りとならざるをえなかった。里農も既出の第1表に示したように、尼米同様、甲功村を形成する14の自然村(村民小組)の1つである。甲

功村から東へ向かい、金沙江沿いの道から少し西へ山道を上り、銅工場を通り過ぎた鉦山の裏手の山すそに、里農は立地している。標高は3100m、年間平均気温は10℃、トウモロコシ・チンクー麦・小麦・ソバなどの農作物を生産している。郷人民政府で入手した2009年の統計資料によると、ここに20世帯128人が暮らしている。耕地面積は129.67畝、林地は8000畝である。里農の総収入は317296元、1人あたりの純収入は1706元というが、後述するように鉦山での労働収入が毎月1000～3000元あるはずで、計算があわない。

里農（リノン）村の名前の由来は、チベット語の「འཕགས（リルン）」からきており、「銅の場所」という意味である。地名からもわかるように、この地に銅鉦があることは以前から知られていた。しかし本格的な開発に及んだのは21世紀になってからのことである。組長のD.T.氏によれば、1993年に国家の地質隊による地質調査が始まり、1995年には国営企業の南方会社が参入、2001年に工場建設、2005年から正式に操業を開始した。里農と南方公司是契約を結び、各世帯から1名ずつ（すなわち20世帯20名）が雇用される取り決めがなされた。雇用条件は里農戸籍の青年であればよく、学歴も男女も問われない。このようにして各世帯が鉦山から一定の収入を得えられるよう保障されているのである。

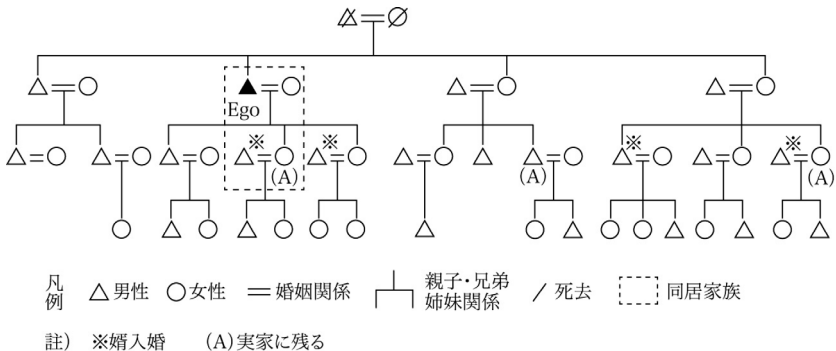
里農の交通事情は尼米よりずっと良好で、バスも通っている。鉦山へトラックが通るため、道幅もある程度広い。しかしこの地区にある布頂寺というチベット仏教寺院には、道路が不通だったため、直接行くことができなかった。『徳欽県志』によれば、文化大革命で破壊される前、同寺院には経堂大殿1と僧舎15があり、僧侶50名と活仏1名がいた。その活仏は達嘎ラマといい、カム地区で著名な活仏の一人であった。その後、1987年に15万円の補助金を得て寺院を再建し、宗教活動を再開した（『徳欽県志』：325）。なお、村長の話によれば、現在16名の僧侶がおり、そのうち3名が活仏である。特に決まった行事はないが、新年の際には各家から薪を奉納している。

D.T.氏の場合

調査の対象であるD.T.氏は里農の組長である¹³⁾。同氏もまた、地元の

情報に詳しいという理由により郷人民政府から紹介を受け、調査対象となった。なお、註13)で述べたような言語上の事情から、同集落での聞き取りは不十分であった。それ故、特にあとで述べる葬儀風習については、関連資料から補足したい。

D.T.氏は現在66歳で、妻(60歳)と次女(30代)、次女の婿(36歳)と4人で暮らしている。次女の婿は四川省戸籍の漢族で、運転手の仕事をしている。一家の孫は2人いるが、他地域で就学しており日常的には集落内にいない。D.T.氏と妻との間には3人の子供がおり、長女は他村から婿をもらって分家し、同村で子供2人をもうけた。次女が家に残って一緒に暮らし、末っ子の長男は他村へ入り婿して2人の子供がいる。どの家族も子供が2人なのは、政策のためである。D.T.氏自身は4人兄弟の3番目であるが、幼い時に両親と死別している。一番上の姉(74歳)は同村に嫁いで3人の子供をもうけ、今も近くで暮らしている。二番目の姉(73歳)も同様に、同村に嫁いで3人の子供をもうけた。末の弟(59歳)は小学校6年まで就学した後、徳欽県の発電所で退職まで働いていた。そのため弟一家だけはずっと羊拉郷にはいないが、末弟にも2人の子供がいるという(第5図)。D.T.氏4人兄弟は、1960年から87年にかけて財産分与を行った。里農で暮らす者たちは土地や家畜を分け、他地



第5図 D.T.家の家族構成
〔出所〕D.T.家での聞き取りにより作成

域へ行つた弟には現金や運びやすいものを分け与えたという。

現在、D.T.氏の家では、畑1畝と開拓地を5分ほど所有している。2011年の収穫高はソバ100斤、チンター麦150斤、かぶ300~400斤、ジャガイモ400斤ほどである。この他に、リンゴの樹3本、クルミの樹6本がある。この地域周辺に冬虫夏草はない。家畜はヤク8頭、黄牛3頭、黒豚5頭、ニワトリ12羽、ロバ1頭を飼育しているほか、番犬も1頭飼っている。一家の収入は年間3万元程になる。このように高収入を得ているのは、以下に述べるように鉱山で働いているからである。

鉱山での雇用について、D.T.氏の家庭では、次女が雇用されている。被雇用者が夫ではない理由は、婿が里農の戸籍に入ることを許されず四川省戸籍のままであるため、銅鉱で雇用される資格がないからである¹⁴⁾。次女は2001年から雇用され、銅の磨き上げ作業に従事している。給料の額は時々の経営状況によってちがいが、良いときは3000元前後、良くない時でも1000元くらいである。また、長女の一家では夫が銅鉱で警備の仕事をもって働いている。末っ子の長男は他所へ婿入りしたので、銅鉱には行っていない。

4. 羊拉郷チベット族の葬儀風習

1) チベット族の葬儀風習の概略

チベット仏教によれば、人の死後、その魂¹⁵⁾は肉体から離れ、「業(ごう)」に従って次の転生へと向かっていく。転生する先は、天・人・阿修羅・地獄・畜生・餓鬼の6つ、いわゆる六道輪廻とよばれる世界であり、そのどこに生まれ変わるのかは、その人の「業(ごう)」、つまり今生あるいは前世からの「行いの積み重ね」次第なのである。普段から良い行いをしていれば、死後も再び人あるいは天の世界に生まれ変わり、反対に行いが悪ければ地獄・畜生・餓鬼の世界に生まれ変わるという¹⁶⁾。

チベット族の葬儀風習については、中国語で鳥葬あるいは天葬と称される、死者の遺体をハゲワシやハゲタカといった肉食鳥に与える葬法「チャトル(བྱ་གྲོ་པ།/bya-gtor)」¹⁷⁾がよく知られている。輪廻転生を信じるチベット族にとって、魂が抜け出た後の遺体はただの抜け殻であるから、

遺体を解体して鳥に捧げても、残酷で不敬な行為には当たらない¹⁸⁾。むしろ布施の功德があると信じられ、また、死者がよりよい来世を得られるよう善行を積む行為だと考えられているのである。善行に代表される鳥葬は、現在でもラサをはじめチベット文化圏の各地で行われている。

しかしチベット族の葬法は鳥葬ばかりではなく、塔葬、火葬、水葬、土葬、風葬などがあるほか、その葬儀風習も個々の集落によって違いがあり、非常に多様性に富んでいるのである。先行研究では、チベット族の葬法といえば、鳥葬ばかりが特別に注目され¹⁹⁾、鳥葬以外の事例研究は非常に少ない²⁰⁾。

今回調査を行った雲南省迪慶チベット族自治州徳欽県羊拉郷は「チベット文化圏」の東南の辺境に位置し、鳥葬が行われていない地域のひとつである。ここには肉食鳥であるハゲワシやハゲタカが多くは生息していないため、鳥葬が発展してこなかったのである。その代わり、木材の豊富な山間部では火葬を主として、また、金沙江や瀾滄江など大河流域では水葬を主として、葬儀がとり行われている。このように、チベット族の葬法は多種多様であっても、チベット仏教の特色である死者の輪廻転生を信じるという点では共通している。そのため、チベット族の葬儀においては、死者を来世へ送り出すための様々な風習が見られるのである。

2) 羊拉郷尼米の葬儀風習

尼米の葬儀法は火葬を主としている²¹⁾。火葬は、ラサ一帯において多くの場合、高僧や富裕層に対して行われる一種の高貴な葬法である。しかし、木材が豊富な尼米においてはそうではない。尼米の火葬場は集落のすぐ向かい側の山腹である。薪で遺体を燃やした後、遺灰の一部は回収して保管し、あとで聖地ラサや聖山聖湖などに散骨する。火葬場に残った遺灰はその場に集めて石を積み、墓をつくる。つまり、火葬場はそのまま墓場でもある。高僧を塔葬にするのは別として、実はチベット族一般人の墓というのは、その存在自体が珍しい²²⁾。なぜなら、鳥葬や水葬にした場合、遺骨も残らず、墓も作らないからである。尼米の周辺には、肉食鳥が多くいないので鳥葬は採用されず、また遺体を一気に流し去るような大きな河川もないため水葬もできない。その点、薪は豊富にある

から、火葬が一番自然な選択肢といえよう。

葬儀の方法については、まず、人が亡くなると僧侶を呼んで読経などして、魂を肉体の外に呼び出す。次に、遺体が身に着けているものをすべて取り払い、首の骨を折って体を縛る。このとき首の骨を折るのは、後で何かの拍子に首をもたげないようにする便宜上のためでもあるが、もうひとつは、この首のところから魂が出て行くともいわれる。こうして遺体を素っ裸にし、うずくまった格好で白い布で包（くる）み、かごに入れて蓋をしておく。火葬の日にも僧侶によって定められる。

火葬の当日、遺体を山腹に運ぶが、このとき各世帯ごとに薪を持参する。そして火葬を行う地点に3つの石を三角形に置き、遺体をその真ん中に座らせる。この時、ラサの方角に向かうように座らせる。遺体の周囲に薪を円錐状に積み上げ、戸主によって点火が行われる。一般的には15人の男性が火を見守ることになっており、遺体が燃え尽きるまでそばで、経を唱えたり、酒を飲んだりして過ごす。途中、ひしゃくで酥油²³⁾をすくい、頭の上から注ぐようにして遺体を燃やす。頭蓋骨がボンと破裂する音がしたら、魂が天に昇った印であるとされる。火葬にかかる時間は約3~4時間、およそ半日ほどであるが、人によっては長くかかる場合がある。火葬に時間がかかる場合には、魂が自分の家や家族に執着し、そこから離れるのを嫌がっているためだと解釈される。そこで死者の家族らが火葬場に呼ばれ、経を読み、死者の魂に「どうか安心して行ってください」などと語りかけながら、遺体に酥油をかけ、早く遺体を燃焼させるようにとりはからう。

火葬した当日は遺灰をそのままにしておき、翌日また来て、遺灰に何か転生の印がないか観察する。たとえば、遺灰に赤ちゃんの足のような模様が見えたら死者が人に生まれ変わる印とされ、鳥の足跡なら鳥に生まれ変わる、といったふうである。観察を終えてから燃え残った遺骨も粉碎し、一部を缶やビンなどに入れる。遺灰はあとで、聖地であるラサや雪山、湖などに散骨する。L.G.氏の場合は、両親の遺灰をヤルンツァンボ川とナムツォ湖に撒いたという。

残りの遺灰は、火葬した地点に集め、そこに石を積んで墓を作る。人

によっては、さらに墓をコンクリートで固め、上から石灰を撒く。L.G.氏の墓はそのようにしていたが、周囲の墓は石を積んだだけのものだった。続いて、経文を書いた布を松の枝にくくりつけたマニ旗を、墓のそばに立てる。風が吹くたびに旗がなびき、経文に書かれた仏法が風に乗って拡がるようにと願いがこめられている。マニ旗は月日が経つとボロボロになるが、そのままの状態で放棄される。日本人や漢族の墓とちがいで、チベット族の墓には死者の名前など刻んだ墓碑はない。L.G.氏の言葉を借りていえば、「遺灰はただの外殻にすぎない。墓はただ死者の外殻を覆っているだけで、死者の魂は墓の中にはいない。死者はもう他のところへ行ってしまったのだから。人界なり地獄なり。とにかく49日以後はもう行ってしまったのだ。」というわけである。以上のことから、チベット族はたとえ先祖の墓があったとしても、日本人が行う彼岸や盆、あるいは漢族の清明節のような墓参りの風習がない。日本人や漢族の風習では、死者の魂が「ご先祖様」となってあの世におり、時々この世に帰ってくると信じられている。しかしチベット族の習慣では、死者はすでに他の世界へ生まれ変わり別の人生を生きると考えるので、先祖を迎えるとか、墓に対して親孝行を示すといった概念は存在しない。ただ、L.G.氏が言うには、特定の日に墓参りをしなくても、毎朝、読経しながら香木を焚く時に、ツァンパと酥油を香炉の中に撒いており、それが両親の魂への供物にあたるのだそうである。香炉はチベット族の家にはよくみられるが、尼米の家屋においてはそれが屋上に設置されていた。

また、興味深いことは、4・5月に土葬と火葬の二次葬が行われていることである。すなわち4・5月の乾季に、遺体を一度土に埋め、秋に再び掘り起こして火葬するのである。これは、その季節に雨が降らず空気が乾燥しているので、火葬によるさらなる乾燥を危惧し、一時的に土葬を行うものである。しかし土葬は、「チベット文化圏」において多くの場合、不吉な葬法、つまり永遠に地獄へと落とし再び転生させないための方法として扱われている²⁴⁾。一方、迪慶チベット地区においては、土葬にそのような差別的な意味はないようである。土葬というのは本来、チベット族がその昔から採用していた最古の葬法であったが、その後、天葬と

水葬にとって代わられた。迪慶チベット地区では清代の乾隆 58 年（1763 年）に土葬が強要された歴史があり、以来、奔子欄地区では土葬も行われているのである（李志農 2009：61）。

3) 羊拉郷里農の葬儀風習

以下では D.T. 氏で代表される里農の水葬について検討していく。同集落でみられる水葬風俗は羊拉郷内における同習俗の典型的な事例であると考えられるからである。

里農の葬法は水葬を主としているが、火葬も併存する。どちらの葬法をとるかは、活仏の判断による。水葬は、迪慶チベット族自治州のチベット族によく見られる葬儀法であるが、その方式には地域によって違いがある。第 1 のケースは、香格里拉と奔子欄鎮にみられる方式で、遺体をしゃがんだ状態にしてチベット式棺桶に入れ、水葬場までかつぐ。着いたらまず、遺体を取り出し、棺桶をばらばらにして水に流してしまう。そして、水流が急な場所であれば遺体を丸ごと川に放り込む。流れが緩やかな場合は遺体を小さく刻んで流すという。第 2 のケースは仏山・雲峰一帯で実施される方式で、棺桶に青松の枝葉²⁵⁾を入れてから遺体を収納する。水葬の時には第 1 のケースと同じように、まず棺桶を流してから遺体を流す。第 3 のケースは、瀾滄江一帯および香格里拉県の北に位置する東旺で行われる方式で、水葬は首吊り自殺など非業の死者に限られる。同地域での水葬は、顔を上に向けた状態で、体に石をくくりつけ、ゆっくり入水させる（張実 2011：67）。また、羊拉郷人民政府内で閲覧した内部資料によると、羊拉郷の水葬には 2 パターンあり、ひとつは遺体を丸ごと水に流す方法、もうひとつは遺体をバラバラに解体してから水に流す方法である。棺材も遺体を流した後に分解して流すと書かれていた。

里農の葬法は、上述の第 1 パターンに該当する。すなわち竹かごで遺体を運び、遺体をまるごと金沙江に投げ入れる方法である。里農では、人が死ぬと遺体に新しい服を着せ、住民たちが慰問に訪れる。住民たちはその後も 7 日間を 1 周期として 49 日目まで毎週、死者の家を訪れ念仏を行う。死者を水葬にするか火葬にするかは活仏に占ってもらい決めら

れるが、水葬になるケースが多いとされる。出棺する日と時刻も活仏によって詳細に定められる。一般的には、死後3日から10日までの期間、念仏して弔い、水葬当日は夜明け前に出棺する。遺体はしゃがんだ姿で縛って竹かごに入れられ、金沙江へと運ばれる。川辺に到着してから遺体を竹かごから取り出し、服など身に着けているものをすべて取り外す。その作業が終了すると、遺体を刻まずに直接、金沙江に放り込む。金沙江の流れは激しいため、遺体は自然と解体され、魚の餌になる。このような水葬は遺骨も残らないため、墓も作らない。何となく寂しい気もするが、迪慶のチベット族にとって水葬は、一種の光栄な、最大の善行なのだということが、以下文献からも追証できる。

迪慶藏族尊崇河里的魚為“河神”，認為尸體被魚吃掉是件榮耀的事，這與天葬中尸骨被鷹鷲吃掉有着相同的宗教原理或施舍意識。（張奕 2011：68）

藏族人民普遍認為，人与自然界的万事万物是可以相互轉化的。人靠自然物維持生存，也應對自然有所貢獻，因而藏族人死后大都要通過天葬，水葬將自己的肉體奉獻給自然界的各類動物。（郭家驥 2008：180）

在仏教教義中“布施”是信徒的標志之一，布施中的最高境界就是“舍身”。按照仏教教義，人死之後，靈魂離開肉體進入新的輪回，尸體就成了無用的皮囊，將自己的肉體奉獻給禿鷲和那些無形的生靈，從而完成此生的最後一件功德。（李志農 2009：60）

つまり、金沙江の西に位置する里農において、水葬は鳥葬と同じ意味をもっているわけである。里農では、魚を捕獲したり食することが伝統的に禁じられている。調査の時、「どうしてチベット族が魚を食べないのか、理解できるか、なぜなら魚は、我々チベット族の心中では菩薩様だからさ。」と W. H. 氏が言った言葉が深く刻まれた。

おわりに

本稿の中で、まず羊拉郷の生業形態について総括すると、半農半牧と言っても家畜の数は多くなく、チンター麦や小麦の生産など農業を中心

にしていることがわかった。しかしこれらも主な収入源とは言えない。これとは別に現金収入を得る手段として、尼米では冬虫夏草とクルミの販売、里農では銅鉞での就労という形態があった。家族形態としては、一家に長男がいたとしても家にのこらず、娘に婿をとらせる「婿入り婚」の事例が両村で共通して確認できた。これは金丸が以前に調査したタンディアオ家の事例（金丸 2008：26-27）とも一致しており、迪慶チベット地区周辺のチベット族に広く共通している婚姻形態であると推定される。

次に葬儀風習に関して、以下の2点が確認できた。第1に、尼米・里農の両集落はそれほど離れてはいないものの、自然地理的条件の違いから、まったく異なる葬法が採用されていること。すなわち、木材の豊富な尼米では火葬を主として副次的に土葬が行われ、金沙江からほど近い里農では水葬を主として火葬も行われていた。第2に、葬儀法には相違があるものの、どちらの集落の葬儀にも、死者の魂が輪廻することを前提とした風習が存在していること。とくに尼米においては、以下の風習が輪廻と関連している。

- ①頭蓋骨がボンと破裂する音がしたら、それは魂が天に昇った印であるとされること。
 - ②火葬に時間がかかる場合、死者の魂に未練があるためだと解釈され、家族らが「どうか安心して行ってください」などと死者の魂に語りかけ、速やかな転生を促す。
 - ③火葬の翌日、遺灰を観察し、転生先を占う。
 - ④墓は作るが、魂は去ったと考え、墓碑を立てない。墓参りもしない。
- また里農については、金沙江の魚に身を捧げることを最高の功德と考えていることがわかった。

このような事例と関連資料を総合して管見したところ、輪廻思想を根底とするチベット族の葬儀において、共通する重要な任務は以下の2つであると、筆者の一人高野は推察している。第1に、死者の魂を肉体から分離させ、よりスムーズに来世へと送り出すこと。第2に、その魂がより良い来世を得られるように、残された者が死者に代わって善行を行うことである。

しかし、青海省や四川省のチベット地域と比較して考えると、迪慶チベット族は随所に漢化現象が見られ、輪廻転生の概念も相対的には淡泊であったように推察できる。例えば、幼い子供が前世を覚えていて自ら語りだすという事例は、他のチベット地域では普遍的に聞かれるが、迪慶チベット地区での調査中、そのような事例を1件も確認できなかった。食生活においても、他のチベット地域では家畜を自らの手で殺生することを極端に嫌う傾向があり、屠殺は回族の手で引き受けられている。たとえチベット族が自身の手で家畜を殺すとしても、ヤクなど大型獣のみで、豚や鶏などは殺さない²⁶⁾。一方、迪慶チベット地区では牛も豚も鶏も貴重な食料であるとされ、毎年自ら手を下すという。漢化現象が最も顕著なのは、迪慶チベット族がチベット文字を失ってしまったことであろう。現在、小学校では週2回チベット語の授業があるというが、奔子欄で見学した小学校の看板も掲示板もすべて漢語でしか表記されていない。そのようなことから「生きた言語」としてのチベット文復活はあまり期待できそうにない。今後も漢化の流れは止められないと推察できる。また近い将来、羊拉郷を再訪し、その後の変化を確認したいと切望している。

註

- 1) 中国では、チベット自治区以外にも周辺の省内に、州と県の単位で、チベット族の自治地区が以下のとおり設置されている。雲南省では迪慶チベット族自治州。四川省ではカンゼチベット族自治州、アバチベット族羌族自治州、木里チベット族自治県。甘肅省では甘南チベット族自治州、天祝チベット族自治県。青海省では海北チベット族自治州、海西モンゴル族チベット族自治州、海南チベット族自治州、黄南チベット族自治州、ゴロクチベット族自治州、玉樹チベット族自治州が挙げられる。
- 2) 事実上、チベット自治区は入域が制限されていることもあり、近年のチベット取材・研究の多くは、むしろ自治区以外の地域を対象として行われてきた。チベット自治区への入域にはビザ以外に入域許可書が必要であり、個人では取得できず、旅行会社に手配をお願いするしかない。さらに現在は、他省の

チベット族に対しても規制が行われており、外国のメディアや研究者が自由に取材できる状況ではない。

- 3) この調査以前に高野は香格里拉県を訪れた経験があったが、当時はあまり現地の人々の生活を間近に見る機会が得られなかった。チベット自治区には経済的・時間的事情からまだ入域したことはない。
- 4) 青海省や四川省など各地のチベット地域で、チベット族による抗議自殺が相次いでいることによる。高野は1年ごとに留学ビザを取得しているため、自治区以外なら比較的自由にチベット族同級生の故郷を訪ね歩くことができている。しかしその場合にも、友人に負担がかからぬよう、念のため大学で証明書を発行してもらい、万々に備えている。
- 5) チベット自治区で実施した調査研究としては、「中国ナシ族の塩作り」(金丸 2007)、チベット族を対象とした調査研究には、「雲南チベット族の牧畜業」(金丸 2008)などがあげられる。
- 6) 日本で発表されたものでは、参考資料にあげた「雲南チベット族の牧畜業」(金丸 2008)、「チベットの芸能と楽器と生死観」(山本 2001)のほか、言語や工芸、一妻多夫婚、建築様式など様々な分野の研究論文が国会図書館に登録されている。
- 7) これら羊拉郷の自然資源と以下の歴史的過程については、政府公式 HP に掲載されている『羊拉郷志』および現地での聞き取り調査からまとめた。インターネットの掲載記事は随時変更される恐れがあるため、論文の引用には適さない。しかし羊拉郷は徳欽県の中でも辺境であり、州や県の史料からは限られた情報しか得られなかった。このような事情から、やむをえず政府公式 HP 掲載の『羊拉郷志』を参考資料として扱った。
- 8) 以下、羊拉郷の統計数値は、2012年9月に実施した羊拉郷人民政府での聞き取り、およびその時入手したプリント資料による。
- 9) 羊拉郷へは、州政府のある香格里拉からトヨタのランドクルーザーをチャーターした。その距離はおよそ212キロメートルほどだが、奔子欄より先ほとんどは、河谷や山腹の舗装されていない道を行くため、ランドクルーザーですら6時間あまりを要した。そのとき羊拉郷人民政府所在地である甲功村の手前の道路は、アスファルトの敷設作業中であった。

- 10) そのほか、鉦山に従事する出稼ぎ労働者の流入により、彼らを顧客とする新しい食堂や入浴施設などが、工場近くで仮小屋の集落を形成している。
- 11) 羊拉郷を訪れた9月中旬、羊拉郷の集落では子供たちの姿を見かけることができなかった。子供たちが自宅に戻るのは年に2回、冬休みと夏休みだけで、その際には県が専用車をチャーターして子供を送迎するという。
- 12) この日寺院にいた26歳の僧侶に、覚頂寺をチベット語でどう書くのかとたずねたところ、たどたどしい文字で“ཇུ་ཇུལ”と書いてくれた。“ཇུ”という字はないので、“ཇུ”の間違いだらうと推察した。ここでは僧侶といえどもあまりチベット文字は上手ではないようである。“ཇུ་ཇུལ”（チャンデン）とは「北に座する」という意味である。同僧侶に生い立ちを聞いたところ、出身はチベット自治区側の布水村で、就学経験はなく、14歳のときに自ら望んで出家したのだと話した。その僧侶は6人兄弟の4番目で、長男次男は入り婿になり、5番目の妹もすでに嫁ぎ、実家にはまだ未婚の3番目の兄と、末の弟が残っているという。
- 13) 同氏は中国語も少し話せるのだが、なまっていて、会話があまり円滑には進まなかった。そこで、運転手のW.H.氏に解説を交えながら通訳をしていただいた。W.H.氏は、漢族の父親と羊拉チベット族の母親を両親に持つハーフで、中国語とチベット語が堪能な上、迪慶チベット族自治州各地を周っているのでチベット族の風習にも詳しい。よって、D.T.氏からの聞き取りは、W.H.氏によるチベット語での通訳と中国語を交えて行った。
- 14) 同行者であるW.H.氏の解説によれば、ひとたび里農の戸籍に入れば、さまざまな優遇政策の対象となるため、外地からやってきた漢族は、たとえ婚姻関係があっても、そう簡単に里農の戸籍に入れないという。
- 15) チベット仏教の教義では「無我」を説いているため、正確に言えば、靈魂の存在を認めていない。チベット仏教教義において輪廻の主体は、魂ではなく、「心相續（意識の連続体）」と解釈される。しかし「对于信仰佛教的藏族人来说，相信人是有灵魂的，虽然佛教只讲“识”不讲灵魂，但在一般信徒眼中二者是平等的。」（才讓1999：226）と指摘されるように、一般では「心相續」と「靈魂」は同等のものとして見られている。
- 16) しかし六道輪廻にとどまる限り、どの世界も苦しみであることは変わりなく、

究極的には輪廻の世界から「解脱」することが最良とされる。解脱の道は専門的に修行を積まないかぎり実現し得ないので、普通の人は無限に輪廻を繰り返している。チベット仏教の教義について、日本語文献では『チベット仏教叢書 ラムリム伝授録Ⅰ、Ⅱ』（チベット仏教普及協会ポタラカレッジ 2006）が専門的であつ読みやすい。

- 17) チャトルの「チャ」は鳥、「トル」は散布するという動詞で、遺体を切り刻んで供養の施食として鳥へ撒くことを示している。（山口 1987：120）
- 18) 1913 年からチベットのラサで 10 年間留学をした多田等観は、こう述べている。「(死体の処置について) 魂のない亡骸であるから、ちょうど石ころ同然に考えている。……日本では考えられないような粗末な死体の扱い方である。運び出した死体は、すべて鳥葬にする。鳥葬というのは非常に乱暴で野蛮なことにように考えられるが、死体には魂がいつまでも宿っているものではないというチベット式の考えによるもので、燃料のないこともあり、この土地の気候風土にもよるのであろう」。（多田 1984：175）
- 19) 『チベット 上』（山口 1987：119）では、「チベットの葬礼ほど昔から奇異の目でみられたものはない。」として、ヨーロッパに伝聞した鳥葬の様子を紹介している。また日本の出版物においても、「鳥葬」「天葬」はチベットの代名詞として使われている。例えば川喜多（川喜田 1960）、丹羽（丹羽 1997）、藤木（藤木 1986）など。
- 20) 同じ徳欽県にある奔子欄の葬儀風習に関しては、「チベットの芸能と楽器と生死観」（山本 2001：102）でほんの少し取り上げられている。それによると、7割が土葬で、残り 3割が遺体を解体して水葬。詳細は書かれていない。また、チベット族の火葬については、ルポルタージュであるが『NHK スペシャル チベット死者の書』でラダック地方の葬儀風習が報告されている。
- 21) 以下の記述は、現地での聞き取りメモと録音ファイルを元にまとめたものである。
- 22) 同じ火葬という葬法をとるラダックでも、墓は作らない。「ラダックには小さい墓と呼ばれるものはありません。死者は必ず輪廻して生まれ変わってしまうので、墓の必要がないからです。遺体は意識が抜けてしまえば、古着のように何の価値もないものだと考えられ、遺骨などへの特別な感情はありま

せん。このような考え方から、墓がないのは、チベットだけでなく、インドも同様です。](河邑厚德・林由香里 1993 : 62)

- 23) ウシ・ヒツジの乳から作ったバター。チベット族は日常的にこれをバター茶やバターランプなどの原料として使う。
- 24) 日本語文献では、多田等観が土葬についてこのように述べている。「高位のラマだけは火葬に付し、罪人は土葬にする。地の中には悪魔がいると信じているのであるから、罪を犯した者は悪魔に食わせるのであろう。](多田 1984 : 176)
- 25) 青松の枝葉は、年越しの際に魔除けとして玄関の門に飾られる。また、実質的には防腐防臭効果もある。
- 26) 小さな動物を食料として殺したがる理由は、大きな動物も小さな動物も命の重さは同じであると考え、大型獣であれば1つの命だけの犠牲で複数人の腹が満たせるからである。すなわち、殺生する命の数を最小限に抑えるためである。

引用・参考文献

中国語文献

雲南省徳欽県志編纂委員会編 (1997)『徳欽県志』雲南民族出版社

中共迪慶州委宣传部編 (2012)『迪慶藏族自治州 州情教育読本』雲南人民出版社

才讓 (1999)『藏伝佛教信仰与民俗』民族出版社

郭家驥 (2008)『發展的反思——瀾滄江流域少数民族変遷の人類学研究』雲南人民出版社

李志農 (2009)「文化辺縁視野下の雲南藏族喪葬習俗解読」『雲南社会科学』第5期, 57-62頁

張実 (2011)「雲南迪慶藏族水文化」『雲南師範大学学报』第43卷第3期, 116-118頁

雲南省政府信息公开門戸網站 (<http://xxgk.yn.gov.cn>)

>> 徳欽県羊拉郷 http://xxgk.yn.gov.cn/canton_model2/default.aspx?departmentid=9439

日本語文献

- 川喜多二郎 (1960)『チベット人：鳥葬の民』角川書店
- 金丸良子 (2007)「中国ナシ族の塩作り一現地調査を中心に一」『中国研究』15号, 21-51頁
- 金丸良子 (2008)「雲南チベット族の牧畜業一尼汝村タンディアオ家を事例として一」『中国研究』16号, 17-43頁
- ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ / 藤田省吾 (2006)『チベット仏教叢書 ラムリム伝授録Ⅰ, Ⅱ』チベット仏教普及協会ポタラカレッジ
- 丹羽基二 (1997)『天葬の国チベット』芙蓉書房出版
- 藤木高嶺 (1986)『天葬の国・高原の民：チベット・パミール・内モンゴル』立風書房
- 山口瑞鳳 (1987)『チベット 上』東京大学出版社
- 多田等観著・牧野文子編 (1984)『チベット滞在記』白水社
- 河邑厚徳・林由香里 (1993)『NHK スペシャル チベット死者の書』日本放送出版協会
- 山本宏子 (2001)「チベットの芸能と楽器と生死観」『アジア遊学』23, 92-103頁